

# 火星



平成17年12月号

# 七曜抄 二

山尾玉藻

秋の蝶しのび返しを越えきたる

潮さぶる音にはたはた跳びにけり

白砂に先づひざまづき菊師かな

天高くなりたる水を掬ひけり

鶏頭やゆつくり砂利をゆくタイヤ

実樁の樹に風強くなつてきし

くれなるの雨降つてゐる枯芙蓉

冬用意違ふ日向に父のゐて

綿虫にゆるりと体を躲されし

数へ日の海鼠の水に顔映る

(一部「俳句四季」より転載)

# 太白星

柳生 千枝子

家族寝しあと音も無く夏去る雨  
松手入なす棟梁の髪の銀  
馬の背が嬉し夕日の芒原  
芒原指傷つけし記憶なほ  
吾亦紅児の持ち歩く虫眼鏡  
愛想よき御用聞来る曼珠沙華  
騎上なる高さ芒の原は銀

杉浦典子

うろこ雲島の教会より生るる  
秋の水蹴りぬ足裏かたくして

秋高し羊ゐる柵ゐない柵  
羊小屋に羊帰れる夜長かな  
雨が降る林檎の実る木の下も  
木乃伊見てきぬ三日月の浮いてをり  
草の絮母がりへゆく切符もち

浜口高子

立ち上がる罨や秋の影を曳き  
胡麻叩き量るともなき掌  
日本海より暮るる唐黍熱し  
黍嵐寄せくる位牌乾拭す  
秋燕夕日さし込む休窯  
野分晴ひとり家のひとり言  
鶏頭の傍かたへに忽と我が齡

# 火星作品

## 山尾玉藻選

十五夜の海の上なる雲若し  
いつさいは今生のこと曼珠沙華  
妻病めば挽ぎたる柿を袖でみがく  
蜂の背の縞うつくしき野分かな  
燃えながら草流れくる秋の暮  
山国の闇垂れてきし新豆腐  
富士山の裾に白桃したたらす  
秋茄子や厨を未だ手離さず  
鳳仙花いつも何かに急かれぬ  
でごいちの駅舎秋陰まとひをり  
蚊柱に水の面のあり毛越寺  
蟋蟀の弟子貌にゐる去来の碑  
尻もちをついて掃かれし子蟻螂

明石戸栗末廣  
八幡吉田島江  
八幡飯塚糸子

霧脚のふくよかなりし獣道  
秋涼の敷居越えたる鳩車  
文机の片付いてゐる小望月  
秋口の倉庫の影の潮溜  
川幅の夕映えに築崩れをり  
栗の毬弾けてゐたる山雨かな  
わが命果つる日雁の渡り来よ  
朝露のオクラにうぶ毛ありにけり  
夢しづくてふ酒もちく十三夜  
亀の背に柳ふれをる良夜かな  
十五夜や子と約束の影踏す  
忙しなく刈田の匂ひまとひ来し  
曼珠沙華快速列車に昏れにけり  
順番に血圧計る良夜かな  
雁渡し低い枕で寝ねにけり  
花嫁のもうすぐ通る葛の花  
毛糸玉虫鳴く方へ転びけり

大和郡山

城

孝子

大和郡山

吉田康子

豊中  
廣畑忠明

# 選のあとに

山尾 玉藻

十五夜の海の上なる雲若し 戸栗 末廣

「雲若し」という表現で成功した句である。このような言い方は昔からあったが、この句の場合は特に適っている。「十五夜」の明りに海と雲が照り合い、美しい景である。

富士山の裾に白桃したたらす 吉田 島江

「富士山の裾」の「裾」を裾野と限定しなくて良い。富士山の見える旅館の座敷でも充分に成立する。富士山という極みの美と、「したたらす」のやや端かない言葉との対称で一句と成った。端たないと言ったが、句は立派なものである。

亀の背に柳触れをる良夜かな 吉田 康子  
順番に血圧計る良夜かな 城 孝子

「亀の背に」の句は、猿沢の池などを想像すると景が鮮明に浮かんでくる。一般には月の句の場合、配合物に動きがない方が良い。しかし掲句は、目線が低く、それほど気にならない。末廣さん同様、美しい句である。

それに対し、孝子さんの句には良い俳諧がある。血圧計は

市販されている家庭用のものである。「順番に血圧計る」には、病に対する思いは全くなく、むしろ楽しんでるようにさえ見える。結局「血圧計」と「良夜」には触発される良いいびきがあるからである。

湯の宿の通草の口に待たさるる 松山 直美

これ以上省略すると解らなくなる、ぎりぎりのところの句である。二、三人で山中の温泉の外湯に行つた時の景を想像すると良い。先に湯を出た作者が待っているのである。待たされている目の前に、熟れた通草が口を開けているのだ。湯ぼてりをおさめるのにも調度良く、待たされることに対する抵抗感はない。この句もまた、品の良い俳諧の句である。

はつきりと見えて奥あり鳥兜 小池 楨女

「はつきりと見えて奥あり」の「奥あり」と当り前のことを言つてのけたことで、具象的な景として見えてきた。立派な構えの門のその奥の庭先に、「鳥兜」が植えられているのである。「鳥兜」にはその色と語感の他に、やはり毒を持つ植物という思いが強い。この一句を支える季語として「鳥兜」は的確である。

(以下略)



# 恒星圈

堀 志皋

舟底の水を掻い出す鯊日和  
少子化の進みてゐたり鯊の竿  
鯊釣の女一人でありにけり  
流木に座りてをりぬ鱗雲  
声変りし始めをりし村芝居

廣畑 忠明

松 たかし

溝そぼの野川跳び越す遊びかな  
村の子の語る浄瑠璃稲の秋  
人恋へば秋の蚊の声過ぎゆけり  
ポンポン船音残し行く水の秋  
曼珠沙華さびしきまでに空の碧

あをぞらにたましひ冷ゆる花野かな  
校倉の裾を払へる萩の風  
稲の香や鴨居に掛かる翁面  
月明の闇を湛ふる埴輪の目  
てのひらを掬ふかたちに菊日和

深澤 鱻

山本 耀子

鬼百合の折れたるままに秋の籜  
あさがほの咲き残りぬし海雲桶  
おほかたの漁具は紐なり酔芙蓉  
高みより二見漁港の野分あと  
晩秋や埴輪のをとこ鷹留めて

枯山水の滝に音する沢桔梗  
座禅了ふまでを待ちをりつくつくし  
長き夜やたたみし図面またひろげ  
秋天へ覆ひ取れたる新屋舎  
直会の夫少し酔ふ菊日和

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西畑敦子

株街の風に生まれし糸のこ草  
しぼらくは水になじまぬ桃であり  
鳳仙花はじけ鶏駆け出しぬ  
万歩計つけて花野の人となる

前田忍

扁平の仏足石や萩の花  
蠅螂の目玉は貌におさまらず  
馬塞の上吹かれてをりぬ子蠅螂  
踏鞴の火消えて久しきかまどうま

河崎尚子

敗蓮覚えある名の千社札  
刀豆の冷え首筋に当てらるる  
通草掌にこの勾配は降りられぬ  
地凶にある鉄塔なりし茸山

加藤君子

この秋は昔ばなしをしてゐたり  
吾亦紅好きなんだけどそのままに  
つくばねの本物をこそ驚ける  
老いふたり屋上に在り今日の月

松山直美

城壁に足場の組まれ鳥渡る  
秋の昼漆の匂ふ城に入る  
蕎麦の花日照りの雨の過ぎにけり  
秋冷の飛驒のことばの朝の市

丸山照子

蛇穴へまどへるころの旅靴  
駅の辺の開拓者墓地月上る  
金輪際うごかぬ鱧や昼の虫  
名月やカンガル―注意の道標

南浦輝子

藤の実や三味線の音とつとつと  
投票日つくつくぼふしに急かされて  
名月の碎けてゆくや鴨泳ぐ  
名月や帰り仕度の作業員